

女性語と男性語

呉 美 善

一般的に、男性の用いるすべてのことばを男性語、女性の用いるすべてのことばを女性語という。語学の研究対象となっているのはその狭義のもので、主に男性が用いることばを男性語、主に女性が用いることばを女性語と見なす。男性語と女性語の特質は両方の比較という研究方法を使って明らかにされている。語彙・語法・発声などの多方面にわたって研究がなされてきたが、男性語と女性語の違いは社会の変化に伴ってだんだん薄くなっていく傾向があるとされる。^(注1)これは、本当の対等な人間関係を目指すという世界的な動きの産物の一つであると思われる。

日本語を外国語として勉強している私にとってめずらしいと思われたのは、現代日本語の中に生きつづけている女性語と男性語の比較的きちんとした区別である。もちろん、韓国語にも女性語と男性語の区別はあるが、日本語ほど顕著ではない。特に女性語というのは日本語の一つの大きな特徴であるので、ことばの裏にある生活習慣や人間関係などが違う外国人の女性にとって、女性らしい日本語の駆使ということは非常にむずかしい。

外国語を学習する時、いちばん役に立つのは辞書である。それは、自国語の場合ももちろんのことで、その時時の言語の実情を反映していると言えよう。それで、一般的に女性語と男性語はどのように意識されているかを以下の辞書によって調べることにした。

- ① 『岩波国語辞典第三版』(以下、『岩波』)
- ② 『角川新国語辞典』(以下、『角川』)
- ③ 『新明解国語辞典第三版』(以下、『新明解』)

1 女性語・男性語としてとりあげられたもの

女性語を婦人語とも言うが、三つの辞書ではいずれも女性語ということばを使っている。この語を語釈の中でどのように述べているかを「女性語」の項目で見ると、以下のように書かれている。

- ・ 女性の特有のことば。接頭語の「お」を多く用いるなど。(『角川』)
- ・ 女性特有の言い回しや単語。丁寧語として「お」を多用したり、感動詞の「あら」とか終助詞の「わ」を使用するなど。(『新明解』)

『岩波』には「女性語」という見出し語は出ていない。しかし、女性語としてとりあげられたことばを見ると、女性の特有のことばとして説明されている。

「男性語」という見出し語は、どの辞書にもとりあげられていなかった。

実例としては、女性語は語釈の中に、「女性語」「女性が使う」「主として女性が使う」のような説明がなされているものを採取した。男性語は、語釈の中に「男が使

う「主として男が使う」などの説明がなされているものを採取した。

三つの辞書のそれぞれの編集方針によって多少差はあったが、一般的な女性語と男性語の傾向を調べるために総合すると〔表1〕と〔表2〕のようになる。

〔表1〕 男性語

① 案下 ^{※1}	⑨ 貴公	⑰ 諸君	⑳ な
② い ^{※2}	⑩ きさま	⑱ 諸公 ^{※3}	㉑ 拝 ^{※5}
③ おい	⑪ きみ	㉒ ぜ ^{※3}	㉒ ぼく
④ おれ	⑫ 兄 ^{けい}	㉓ ぞ ^{※4}	㉓ やっこ
⑤ おやじ	⑬ けだし	㉔ 尊兄	㉔ 老生
⑥ 貴下	⑭ 賢台	㉕ 尊公	㉕ 老台
⑦ 貴君	⑮ 失敬	㉖ 大兄	㉖ 我輩
⑧ 貴兄	⑯ 小生	㉗ たまえ	

※1 手紙の脇付に使うことば。

※2 終助詞。

※3 終助詞。

※4 終助詞。

※5 〔手紙文の最後で〕差出人の名前の下に書いて、「謹んで差し上げる」という敬意を表わす語。

〔表2〕 女性語

① あたい	⑪ おこし	⑰ おぼつけ ^{※7}	㉑ ささ
② あたくし	⑫ おこた	⑱ おはね	㉒ たべる
③ あたし	⑬ おこも	㉓ おはもじ	㉓ 男性
④ あなかしこ	⑭ おこわ	㉔ おはり	㉔ ちょいと
⑤ あら	⑮ おさつ	㉕ おひいさま	㉕ つまんなへ
⑥ あらあらかしこ	⑯ お三時	㉖ おひさま	㉖ てば
⑦ あれ	⑰ おしも	㉗ おひなさま	㉗ てよ
⑧ あれえ	⑱ おしたじ	㉘ おぶう	㉘ ねえ
⑨ うち ^{※1}	㉑ おじや	㉙ おむすび	㉙ の
⑩ え ^{※2}	㉒ おす ^{※3}	㉚ おめもじ	㉚ ばか ^{※8}
⑪ おいた	㉓ おすまし	㉛ おもと	㉛ ま ^{※8}
⑫ おうす	㉔ おせん	㉜ おんもと	㉜ まあ
⑬ おかか	㉕ おたま	㉝ かしこ	㉝ まあまあ

㊤ おかがみ	㊤ おつくり	㊤ かしら	㊤ まいる
㊦ おかき	㊦ おつむ	㊦ かちん	㊦ むし ^{※9}
㊨ おかちん	㊨ おてし _ょ ^{※4}	㊨ けども	㊨ もち ^{※10}
㊬ おかわ	㊬ おにぎり	㊬ 御酒	㊬ もの
㊮ おぐし	㊮ おにまし ^{※5}	㊮ こと	㊮ ようってば
㊰ おくるみ	㊰ おねし _ょ	㊰ 御不浄	㊰ わ
㊲ おこげ	㊲ おねば ^{※6}	㊲ ざあます	㊲ わらわ

※1 わたし。

※2 終助詞。

※3 御酔。

※4 手塩皿。

※5 御似まし。親などに似ておられる。

※6 飯のたけた時に出来る、ねばねばした汁。

※7 菜漬。

※8 感動詞。軽く驚いた気持ちを表わす。

※9 味噌。

※10 もちろん。

〔表1〕によれば、男性語では、「案下」「小生」など文章語的に使われているものと「おい」「おれ」など日常的に使われている語とを比べると、前者の方がはるかに多い。これに対して〔表2〕の女性語の方は、「おもと」「おんもと」を除いてすべて日常用語である。しかし、「おかちん」「おねば」「おてし_ょ」など現代日本語ではほとんど使われていないことがとりあげられているのは疑問である。遊里語、女房詞と指摘されているもの、「江戸時代の女性がよく使った」などと書かれていたものは除外して、「女性語」あるいは「主として女性が使う」などと書かれたもののみを採取した結果であるから、〔表2〕に出てくるのは現代日本語のはずである。編集方針にも、「……現代の言語生活において最も普通に用いられる日本語に就いて、その多岐にわたる用法を種種の角度から内省、確認し……」（『新明解』）のように書かれている。ここに執筆者の現代語の意識にずれがあるように思われる。

II 女性語と男性語の特質

〔表1〕と〔表2〕のことがばを比較することによって、女性語と男性語の特質を調べてみることにする。

まず、語の種類からみると、〔表1〕の男性語の中で漢語は、「案下・貴下・貴君・貴兄・貴公・兄・賢台・失敬・小生・諸君・諸公・尊兄・尊公・大兄・拝・老生・

老台・我輩」の18語もある。これに対して、「表2」の80語の女性語の中で、漢語は「(お)三時・御酒・御不浄・男性」の4語にすぎない。

個人個人の経歴や教養の相違、また置かれた場によって差はあるが、女性は固い感じのことは避ける傾向がある。^(注2)漢語をあまり使用しないのも、漢語自体が持っている強くて固い感じのせいであろう。

つぎに、「表1」と「表2」を品詞によって分類してみよう。

〔表3〕

品 詞	男 性 語	女 性 語
名 詞	案下 おやじ 拜 (3語)	おいた おかか おか ちん…… (49語)
代 名 詞	おれ 雅兄 貴下 …… (20語)	あたい あたくし あたし うち わらわ (5語)
終 助 詞	い ぜ ぞ (3語)	え かしら こと ねえ の もの わ (7語)
感 動 詞	おい 失敬 な (3語)	あら あらあらかしこ あれ あれえ かしこ ちょいと ままあ まあまあ (9語)
そ の 他	たまえ けだし (2語)	あなかしこ まいる (10語)

名詞の場合、男性語は三つしかないが、女性語は49語もある。49語のほとんどである44語に接頭語の「お」が付いている。「お」の付いたことばに関しては、次の■で調べることにする。

男性語の中で、代名詞は20語で採取した31語の%を占めている。一人称を表わす代名詞は「おれ・小生・ぼく・老生・我輩」の5語で、残りの15語はすべて二人称を表わす代名詞である。二人称代名詞は、「きさま」一つを除けばすべて手紙などに用いられる敬称の代名詞で文語的表現である。また、男性同士が使うことばがほとんどである。男性語とは違って、「あたい・あたくし・あたい・うち・わらわ」の5語の女性語はすべて一人称代名詞である。

一般的に、女性は特有の終助詞を好んで使うと言われている。^(注3)私自身も、「呉さんの日本語は男みたいですよ。」と友だちに言われて、やたらに文末に「わ」とか「こと」のような終助詞を付けて笑われた経験があるぐらいである。終助詞が人称代

名詞と共に、小説やシナリオを読む時、話し手の性別を判断する大切な手がかりとして役立っているのは、やはり女性が好んでよく使うからだと思われる。このような性質は感動詞も持っている。採取した終助詞と感動詞を見ると、女性語の方が男性語より多様であるが、これは女性語の傾向をよく表わすものの一つである。

■ 「お」の付いた女性語

女性語の特質の一つとして、敬語的表現、丁寧な言い方の多用がよくあげられる。真下三郎氏は、著書『婦人語の研究』^(注4)の中で、「……語の形態から見て、婦人は敬意や鄭重さをあらわす接頭辞「お」「ご」「おみ」などを付けた言葉を多く用いることである。」と述べている。『角川』、『新明解』の女性語の説明の中にも、この接頭語「お」の多用が言及されている。採取した49語の名詞の中、「お」「おん」「ご」を付けた女性語は44語である。特に、「お」を付けたのは41語にのぼっている。その41語を分類すると、〔表4〕のようになる。

〔表4〕

食 品	おうす おかか おかがみ おかき おかちん おこげ おこわ おきつ お三時 おしたじ おじや おす おすまし おせん おたま おにぎり おねぼ おぼつけ おぶう ^{*1} おむすび (20語)
身 体	おぐし おつむ (2語)
衣 服	おくるみ おこし (2語)
日常生活	おかわ おこた おしも おてしよ おつくり おねしよ おぶう ^{*2} (7語)
人 物	おこも おはね おはり おひいさま おひなさま (5語)
そ の 他	おいた おにまし おはもじ おひさま おめもじ おもと (6語)

※1 湯・お茶

※2 ふろ

食品に関することばが20語で半数を占めている。それに、身体・衣服・日常生活に関するものまでを入れると、だいたい女性の言語生活の範囲というものがわかるような気がする。社会とか政治、経済ということばとは違って、家庭ということばを想起させるものが多い。

接頭語「お」の用法^(注5)としては、

- ① そのもの、そのことを尊重して「お」をつける

- ② 動作主や所有者を敬して「お」をつける
- ③ 特に相手の所有や動作、状態を表わすために「お」をつける
- ④ 相手の状況を表わしつつ一般化して、あいさつことばとなった「お」
- ⑤ 自分の動作や状態のかかわる相手を尊敬して「お」をつける
- ⑥ 一般的美化のしるしに「お」をつける
- ⑦ 「お」をつけないと、ことばにならない慣用法

などがあげられる。41語の女性語は⑥番目の「お」に属するもので、丁寧の「お」とも言われる。

「お」が付いて女性語となった41語を「語の構成」という面から見ると、みんな同じではないことに気がつく。

- ① 「おす」のように「す」という元の語に「お」を付けたもの
- ② 「おいた」のように「いたずら」という元のことばを半分略した「いた」に「お」を付けたもの
- ③ 違うことばに「お」を付けたもの
- ④ 元の語に接頭語「お」と接尾語「さま」を付けたもの
- ⑤ 女房詞の一種で、元の語の後半を省略し、その部分に「もじ」を付けたものがあるが、それに「お」をつけたもの

などがある。同じ構成を持っている語を集めてみよう。

[表5]

① 「お」 + 元の語	おくるみ おこげ おす おねば おはり おばつけ おむすび おもと (8語)
② 「お」 + 略した語	おいた (いたずら) おうす (薄茶) おかがみ (かがみもち) おかわ (かわや) おこし (腰巻) おこた (こたつ) おこわ (こわめし) おさつ (さつまいも) おすまし (澄まし汁) おせん (煎餅) おたま (たまご) おてしょ (手塩皿) おにぎり (にぎり飯) おねしょ (寝小便) (15語)
③ 「お」 + 違う語	おかか (かつおぶし) おかち (餅) おぐし (髪) おこも (こじき) お三時 (おやつ) おしも (大小便) おしたじ (しょうゆ) おじや (雑炊) おつくり (化粧) おつむ (頭) おはね (おてんば) おぶう (湯・お茶・ふろ) (12語)
④ 「お」 + 元の語 + 「さま」	おひさま おひいさま おひなさま (3語)

⑤ 「お」+略した語+「もじ」	おめもじ おほもじ	(2語)
⑥ その他	おにまし	(1語)

以上から略した語に「お」を付けたものと、違う語に「お」を付けたものが大部分であることがわかった。

まとめ

〔表1〕と〔表2〕のことは対象として小型日本語辞典では、女性語と男性語はどのように扱われていて、どのような語がとりあげられているかを調べてみた。まとめてみると次のようになる。

- ① 「女性語」という見出し語はあるが、「男性語」という見出し語はない。
- ② 「女性語」は「女性特有のことば」と定義されている。
- ③ 男性語は31語、女性語は80語が採取された。
- ④ 採取された31語の男性語の中で漢語は18語もあるが、女性語の漢語は4語にすぎない。
- ⑤ 品詞別に分類すると、男性語には代名詞が多く、女性語には名詞が多い。
- ⑥ 男性語の代名詞には、手紙などに用いられる敬称の文語的な二人称代名詞が多い。
- ⑦ 女性語には終助詞と感動詞のような強意的表現がよく使われる。
- ⑧ 女性語には接頭語「お」を付けたことばが多い。
- ⑨ 「お」を付けた女性語には食品に関することばが多い。
- ⑩ 「お」が付いている女性語には、元の語を略したものに「お」を付けたものと、元の語とは違う語に「お」を付けたものが多い。

以上のようなものから、辞書の中で男性語はあまりとりあげられていないことがわかった。これは男性はことばの制約を女性ほど受けていないという事実を反映しているものと見られる。女性の言語生活は従来、家庭という世界を中心に行われていた。現今では、家庭外に出て、社会人として行動する人も多くなってきた。採取した80語の中には、「こんな女性語があったのか」と思われるようなものもあるし、「これは男性もよく使うことばではないか」と思われることばもあるだろう。

ことばはどんどん変化していく。それを言語事実としてとらえてある時期の言語行動が把握できることになる。辞書はつくるのに長い歳月を要する。たえず、変化していくことばを固定しておくことはできない。このような理由で辞書は変化に敏感ではないとも言えるが、ある一時期の一般的な傾向はわかると思う。十年かまた何十年後、今と同じ調査を行ったら違うことばが採取されて、その間の女性語と男性語の変化を把握することができるはずである。

- 注1 前田富祺 「女性の言語生活史」(『言語生活』No.262)
寿岳章子 「男性語と女性語」(『国文学』S38.2.)
宇野義方 「男とことば 女とことば」(『国文学』S46.1.臨時増刊)
- 注2 『国語学大辞典』(東京堂)
- 注3 注2と同じ
- 注4 S44.2.5.東京堂
- 注5 林 四郎 「ことばづかい」
(敬語講座⑨『敬語用法辞典』、S49.4.20.明治書院)